

Ⅲ Engelhard Weiglシニアレクチュアラー（アデレード大学、オーストラリア）の短期招請について

文学部教授 恒川隆男

国際交流基金事業の外国人学識者招請（短期）プログラムによって、協定校でもあるアデレード大学（オーストラリア）からエンゲルハルト・ヴァイグル教授に、1997年11月5日から12月4日まで本学に来ていただくことができた。

教授はアデレード大学でドイツの文学のみならず、幅広く文化や社会について、研究・教育活動をしておられる。教育活動が研究にフィードバックされることも多々あり、今回明治大学で行われた講演の一つ『罪責の拒否——1945年以降のドイツ人再教育における困難について』も、ゼミでの学生の問題提起が研究のきっかけだったということである。

教授は1943年生まれだが、80年にハンブルグ大学で、『啓蒙と懐疑——ジャン・パウルの初期の作品についての研究』によって哲学博士の学位を取得された。ジャン・パウルは、錯綜した文体とユーモアとペーソスで知られる19世紀の小説家である。教授が学生時代にもっとも影響を受けたのは、ハンス・ブルーメンベルクのゼミナールだったということだが、これもまた『Die Legitimität der Neuzeit（近代の正当性）』をはじめ、難解な思想家である。こう書くと教授もまた難解なことを言ったり、書いたりしそうだが、案外というか、全くというか彼にはそういうところがない。筆者がいつだったか彼に、「あなたのご推薦のブルーメンベルクを読もうとしたけれども、難しくて往生した」と言ったら、「僕だって10回も読んだページがいくつもある。それでも今だってわからないところがあるよ」という返事だった。彼がこんなことを言うのは、わからないところを曖昧にしないではっきりものを考えようとするからなのだろう。だから彼の言うことも、書くことも率直で分かり易い。

教授は博士号取得の1年前から1983年までマックス・プランク研究所の研究助手

を勤められ、ベルリンの Hauptschule（小学校）Gesamtschule（中学、高校を一緒にしたもの）を対象にフィールド・ワーク的な研究に従事された。

教授は1983年に、DAAD（ドイツの学術交流機関）の派遣講師として来日し、東京大学教養学部で5年間教鞭を取られた。ドイツの文学や思想、あるいはまた教育制度についてゼミや講義をなさっていたが、当時彼と同僚であった筆者は、1920年代のドイツの映画についてのゼミを手伝ったことがある。ビデオもそう多くなかった頃なので、缶に入れた重たいフィルムを一緒に教室に運んだりもした。プロッホが『Spuren（痕跡）』の『門のモチーフ』という章で分析している死神の映画などは、筆者は当時彼の解説ではじめて知った。この頃彼は明治大学でも兼任講師として学生の指導に当たられた。今回の招請でも、当時の学生たちと旧交を温められたと聞いている。その後、教授はアデレード大学に移られ、そろそろ10年になる。

教授にはたいへんユニークな著書がいくつかある。『近代の小道具たち』（青土社、1990年）は、実験道具等、さまざまな小道具の発明が科学史にどのような影響を与えたかを論じたものである。『啓蒙の都市周遊』（岩波書店、1997年）では、ドイツの諸都市において大学や出版社などの機構や知識人たちの人的交流が、そこで生まれた思想の形成にどのようにかかわったかが分析されている。いずれの場合にも教授の著書は、ユニークな論理が博学なエピソードをまじえて展開されているのが特徴である。

本学でヴァイグル教授は、大学院生を対象としたゼミナールを2回、講演会を2回行った。いずれも盛会であった。

大学院でのゼミナールはカント時代のケーニヒスベルクをテーマとしたものである。当時のケーニヒスベルクはフリードリヒ大王の統治下にあり、7年戦争では一時ロシアに占領された。フリードリヒ大王は18世紀前半のケーニヒスベルクを文化とは無縁の、むしろ熊が育つのに適当なところだと思っていたこと、ロシア軍の占領によって大学はかえって格上げされ、ロシア軍の将校たちは大学の講義を聴くこ

とが義務づけられていたこと、ケーニヒスベルクには書店があったが周囲の都市には全くなかったこと、ケーニヒスベルクに書物を持ってくる出版社は、ケーニヒスベルクの教授や学生にも本を書かせて、いわば物々交換で本を取り引きしたこと、カントは定期的に人々を招いて食事をし、時事的な問題、哲学的な問題を議論することを好んでいたことなど、耳新しいエピソードがユーモアを交えて紹介され、学生諸君も大いに興味を引かれて、質問も活発だった。

講演の一つは『多様性か分裂か——18世紀ドイツの政治的現実の二つの側面 (Vielfalt oder Zersplitterung——Zwei Aspekten der politischen Realität Deutschlands im 18. Jahrhundert)』という題で、11月8日に和泉校舎の研究棟会議室で行われた。18世紀のドイツでは文化は複数の都市によって担われる多極構造をしており、文化をリードする首都のようなものがなかったことが、かえってこの世紀のドイツ文化を多様で創造的なものにしたというのが論旨である。当時ウィーンを文化的な首都にしようという動きがある一方で、ゲーテをはじめとする多くの知識人たちが中央集権的なドイツを望んでいなかったこと、フリードリヒ・ニコライが出版していた啓蒙主義の雑誌Allgemeine Deutsche Bibliothekが地方の小都市でも読まれ、空間的には中心を持たない文化に相互コミュニケーションの場を与えていたことなど、さまざまな興味深いデータが語られた。聴衆は40人ほどで活発な質疑応答があった。

もう一つの講演『罪責と拒否——1945年以降のドイツ人再教育における困難について (Schuld und Adwehr——Über die Schwierigkeiten bei der Umerziehung der Deutschen nach '45)』は、明治大学国際交流センターから'97年に出版された『明治大学国際交流基金事業招請外国人研究者講演録No.10(1997年度)』に、ドイツ語の全文が商学部の広沢絵里子専任講師の訳とともに収録されている。ここで論じられているのは、ナチ時代に、ゲルマン民族は優秀な民族だという宣伝によって、また占領地などで国家に奉仕する仕事をあたえられたことによって、生き甲斐を見出した人々が、戦後ナチが全面的に否定された後はたして考え方を変えることがで

きるであろうかという問題である。教授はポーランドの占領地で活躍した二人の女性を具体例として、この問題を解明しようとした。一人はジャーナリスト、一人は医者であり、前者は27歳で、後者は35歳で敗戦を迎えた。ジャーナリストの女性は敗戦後5年間はナチの犯罪性を認めようとせず、その後、ナチ時代を客観的・批判的に認識できるようになるまで、数年間におよぶ精神的危機を乗り越えなければならなかった。医師であった女性は、ナチ時代の世界観が無意味になったことを悲しんで一生を終えた。この講演を聞くと、青年時代に教えられ、生き甲斐まで与えてくれた考え方を、後で変えることがいかに難しいかがよくわかる。考え方——思想にまでなっていないからこそ——というものは、ただ考えられたものなのではなくて、文字通り生きられたものなのだからなのだろう。この講演の後では、戦争責任の問題は勿論日本にもある問題なので、講演で問題になったケースとは逆に、戦争を一切知らない世代が戦争責任をどう考えるべきかについて活発な議論が展開された。

蛇足ながら、ヴァイグル教授はアデレード大学に赴任されてから、オーストラリアのワインにも興味をもたれ、いまでは精通しておられるようである。また、東京の喫茶店にも関心がおありで、オーストラリアに帰ったら雑誌に書くのだということで、学生諸君からも情報を得て、取材のための喫茶店巡りにも熱心だった。